

京鹿子



三十三年九月二日第三三三號
二十一年十一月一日發行
一號 每月一圓一日發行

11月号

盆 燕

丸山佳子

この汗のうしろ髪引く近江富士

立て板に水のごとしや今朝の秋

「また来ます」言はせてくれる青柿村

立 葵 身 丈 い ち ず に 独 身 主 義





今日も不在時計草はみんな実に
これほどに小銭のふえて盆買物
大向日葵ひとりで咲いた顔をして
海彦も山彦君も盆帰り
待ってる国あるはずに盆燕
この声で地球が廻る夕かなかな

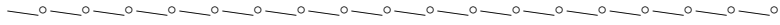


豊田都峰

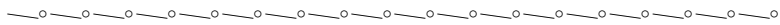
清響集 その九十一

通草採り秘めごとめきし道しをり
思ひ出は通草の蔓を引きしより
はなれ座す待宵の野の水ほとり
山の端の待宵へ高なびく草
夜のこだまふたつとはなき葉月潮
鯛焼くしたたるは潮のひとしづく





妙音のくさむらとなる良夜かな
池畔なる一木として良夜なる
様かくすことにこまめな秋扇
分水嶺穂にでしすすきの雲あそび
ひとすぢの里抜く鮎の川となり
霧の朝目薬青きひとしづく
野の一樹霧の描きて霧の消す
つぎつぎと霧生まるらし灯をかかぐ



秀華採集

語られぬこと蔵に充つ桐の花

小堀 寛

蔵には古きものが仕舞われているが、それぞれに謂れがある。封印されたものから新聞紙につつまれたものもある。そんな蔵に「桐の花」の高さがふさわしい。

おほかたは烏瓜の花星仰ぐ

伊藤 希 眸

折り返すところに畳む白日傘

井尻 妙 子

前句のレースのような花と星座の重ねは美しい映像である。後句の心構えはおくゆかしいものがある。

近 詠

小鳥来る

鈴鹿 仁

うつうつと鷺立つ刈田風の中

刈田暮る一つ二つと灯の招き

栗をむく輝やく一語探しをり

新涼の比良の昂り句碑生るる

(海道・佳子両先生記念句碑祝句)

句碑祝ふ比良を住処の小鳥来る

(海道・佳子両先生記念句碑祝句)

一陣の風は理由ありこぼれ萩

(秋まつり)

紅萩のひと日の念ひ風に聴く

(秋まつり)

近 詠

追悼(その二)

宇都宮滴水

中秋の彩たとふれば常の花

いまさらに鳴くとは未練老うぐひす

さまざまの彩よみがへる秋の雲

悲しくば鳴きつつ帰る秋の鳥

晩夏の灯籠りつづけて暁となる

夏灯しさびしさ故に影つくる

なぐさめの言葉頂く夏の星

神麓集



松田 都青
 児の頃の平らな記憶灼けてをり
 母よりも父が詩になる夏の果
 廃鶏のやうな余生と決め涼し
 粽解ききつい言葉の後始末
 炎日や老ゆれば迅し時の馬車

高木 智

遠雷とんらいや彦左衛門の遺志として
 しもつけ草蔭くさかげのはたらきいやちこに
 膝ひざまくら許されし日も暑かりき
 胸吸へば積年の汗どつと出づ
 蝉時雨ほどの騒めき邂逅す

落葉の譜 竹貫 示虹
 葉を落しつくしいよいよ大樹たり
 往生のよきお手本や木の葉散る
 落葉掃く逆らふ風を叱りつつ
 黄落やこんにやくに味しみてくる
 十一月臨終の句を急がねば

天女タイム 彌寝 瓶史
 夢二期の筆順辿れば月見草
 秋風裡羅漢一体語りかく
 桃園の天女タイムとなり灯る
 勝ち止まる赤色体の木の実ごま
 隠れ果せし時効灯虫が句集出づ

迷ひ雲 荻野 千枝

噴水やあふれくるものあふれしめ
 打水に蝶綺羅とたつ夕垣根
 紅灯の滅びし露地に佇つ炎帝
 碧き星より眺めば朱き星涼し
 迷ひ雲朝の夕顔咲き揃ふ

八十路の紅 北川 孝子
 吉符入雲はちからをためて居り
 同じ名の少女とわたしほたるの夜
 受けて立つ事のあるこれ半夏の芽
 日焼して自虐めきたる遠歩き
 鬼灯や八十路の紅をこころにも

神麓集



敗戦忌

山田をがたま

玉音放送聞きとり難かり敗戦日
敗戦知る地下工場の汗の中
被ひはづし灯ともせる夜や敗戦日
戦中戦後青春ただ中敗戦忌
昭和語る昔の乙女ら敗戦忌

花火

丹生をだまき

宵ごとに手花火せしも夢の夢
咲き乱る花火のあとのうるし闇
一日で縫ひし浴衣を着て逢ひに
大花火揚げしは昨夜か海風げる
花火百句の軸に掛け替へ句友待つ

総理の辞任

川崎光一郎

唐突に総理の辞任する厄日
コスモスのしなやかにまたしたたかに
神域の静寂を破る鴉の声
虫の音のすずろいざなふ自戒かな
廃屋の朽ちるにまかせ葛の花

曼珠沙華

柴田 朱美

びしよ濡れて鎮魂の日々曼珠沙華
半熟の風にとまどふ曼珠沙華
煮えきらぬ男の背中曼珠沙華
曼珠沙華真昼の畦に自爆せり
濁音の全景昏し曼珠沙華

青い牛車

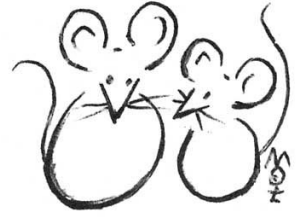
伊藤 希眸

青僧の汗拭く隙をもらひけり
牛車は青御簾のむこうに蠅人形
捕へ食ふまでは動かさず青蜥蜴
青芒声揚く人は野の果てに
青かさね苔葉は太古の沼造り

良夜

丸井 巴水

抽斗へ手鏡仕舞ひ良夜なり
秋の湖身軽なものは飛翔せり
紅唇のほとけ観し夜の冷奴
才女には弱き男気夏日終ゆ
水打つて風を惑はす縄暖簾



京鹿子集

豊田都峰選

語られぬこと蔵に充つ桐の花

奈良 小堀 寛

亀古りてうずたかくあり雲の峰

折り返すところに畳む白日傘
次の間もそのつぎの間も蝉しぐれ

京都 井尻 妙子

大悲闍たれか名づけし大西日

森晩夏もつと遠くへ行く筈が

日焼ける機長すらりと着陸す

さくらんぼ童心すこし転がして

人形の笛かたむけり桐の花

朝ぐもり目に付く場所に常備薬

滝すだれ夜を綴りゆく水の音

花みずき架け橋となる日を胸に

江戸 伊吹 之博

落ちさうな山百合崖を支へをり

茄子の花アフリカからの旧友たより

郭公や石佛二体また五体

夾竹桃公園の子等変われども

兄弟を螢籠より連れ出せり

応援す国また増えて夏季五輪

おほかたは烏瓜の花星仰ぐ

山法師はじける笑顔土産とす